

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域で育むキャリア教育

地域との探究活動や、町行政や商工会と連携した地域に開かれた学校づくりなど、高校魅力化のトップランナーとして注目される大崎海星高校。島の人・仕事を紹介する冊子「島の仕事図鑑」制作は、教育活動であり地域づくりにつながる取組です。



地域を育て 生徒を育てる 『島の仕事図鑑』

第24回

大崎海星高校
(広島・県立)

取材・文／江森真矢子

学校に卒業生や社会人を招いて話を聞いたり、職場に向かいインタビューをするといった取組は、キャリア教育の定番と言ってよいほど、多くの学校で実践されている。経験のある方ならば、普段会わない大人と話すことで視野が広がったり、積極性が増したり、時に人生の指針となるような言葉に出会って成長する生徒の姿を見てきているのではないだろうか。

今回紹介する大崎海星高校の「島の仕事図鑑」プロジェクトもそんな職

業人インタビューのひとつ。ただし、生徒の成長はもちろんのこと、学校や地域の活性化にもつながっていることが特徴だ。生徒有志が制作に参加する『島の仕事図鑑』は、2014年に大崎上島町が移住定住施策として予算化した冊子で、商工会が制作を担っている（下写真）。移住希望者向けのパンフレットとして企画されたが、住民が地域の魅力を再発見する、あるいは課題を考えるきっかけになるなど、地域づくりに寄与するものとして、1号目から町内全戸に配布されるようになった。また、4号目からは町内にある広島商船高専の学生も制作に参加するようになり、制作と絡めて島の未来を語り合うイベントも開催されている。

プロジェクトによって町民と生徒、地域と学校の垣根は低くなった。それまでお互いが抱いていたのが「よく知らない」「先行きが不安」というイメージだとすれば、今は共に手を携えて未来を創る前向きなもの変わってきている。

発行を重ねるごとに増す 生徒の参画度

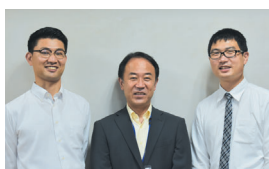
きっかけは、14年に発足した学校活

性化地域協議会のメンバーに商工会員があり、企画が立ち上がった。「島の仕事図鑑」制作に、高校生も参加させてはどうかと働きかけたことだった。「当時はキャリア教育のこともよく知らず、すべて大人がお膳立てして上から指示するスタイル。インタビューには高校生が同行しましたが、文章は全部大人が書きました。また、高校生の撮った写真のほとんどを後から私たちが撮り直しに行きました」と語るのは大崎海星高校魅力化推進コーディネーターの円光歩氏。

その頃は「大人はお金のために仕事をしていると思っていただけそうじゃなかった！」「何も無い島だと思ってたけど面白い人がたくさんいる！」と気づきを得る一方、やらされ感を感じている生徒もいたという。生徒の主体性を高め、成長を実感できるようにするためにはどうしたらよいか。2号目からはインタビューの内容を生徒が考えるようになった。また、生徒は1号の制作につき2、3カ所に取材に行くが、直後に振り返しを行っている。そうすることによって、メモを読んだだけだったのが徐々に臨機応変な会話ができるようになる

これまでに発行された『島の仕事図鑑』

2015年に第1号が発行された『島の仕事図鑑』はUターン、造船・海運、農業、地域福祉とテーマを変え、5号目は「学びの島」として職業にかかわらず学び続ける大人の姿を取材。最新号は「島の未来図鑑～継ぎて」として事業や伝統文化を受け継ぎ未来につながる島の姿を紹介している。これまで発行されたものは、大崎上島町商工会WEBサイトから閲覧可能。同サイトでは制作の様子を紹介するムービーも公開されている。



(写真左から)円光 歩氏
(魅力化推進コーディネーター)、大久保信行校長、
兼田侑也先生

School Data

1998年、共に80有余年の歴史をもつ木江工業高校と大崎高校が統合/普通科/生徒数91人(男子42人、女子49人)/進路状況大学短大11人、専門学校9人、就職12人/2018年 キャリア教育優良校 文部科学大臣表彰 受賞

るなど、生徒自身が成長の手応えを感じられるようにもなっていた。造船・海運をテーマとした号では、働く人たちのカッコよさに痺れた生徒が描いた「船男子」のイラストが表紙に採用されるなど、徐々に生徒の参画度を高めている。

制作にあたっては、事前に3回のワークショップが行われている(下図)。初回は商工会から制作意図やテーマの説明がなされ、自分たちの責務を覚悟する。広島商船高専の学生とのアイスブレイクを経て、インタビューシートを作成するまで約2時間。2回目はプロから写真撮影を教えてもらい、3回目は先生を相手にインタビューの練習だ。高専には他県から、職業意識を明確にもって入学している学生も多く、違いを乗り越えて会話することで刺激を受け、コミュニケーション力がつくと感じている生徒も多い。

さまざまな役割を体験し 引込み思案な生徒ほど成長

5号目制作の年に赴任した兼田(かねた)先生は「今は取材時の進行をすべて生徒が担うようになりました。普段とは違うグループで、今回はリーダーっぽくがんばろうとか、いろいろな役割に挑戦してほしい。カメラマン役を設定したのもよくて、話すことが苦手でも、そ

のうち自分から質問したり、次はインタビューをやってみようという子がいます。引込み思案な生徒ほど成長が大きいですね」と言う。本番の取材は海星生2人、高専生2人と引率者で相手先を訪問するが、メンバーが固定されず、インタビューも偏らないように配慮をしているそう。

発行を重ねるうちに、一部の生徒だけの成長機会とするのではなく、授業の教材としても使われるようになった。例えば国語表現の7コマを使って行われたのは、取材メモを元に文章を書き、写真を選び、キャッチコピーをつけるという授業。グループで制作し、投票によって選ばれた記事が冊子に採用された。また、総合的な探究の時間に地域の人を招いて話を聞く際には、生徒が仕事図鑑からゲストを選んでいく。自分たちが興味をもった人が来てくれるので、聞く姿勢が大きく変わる。

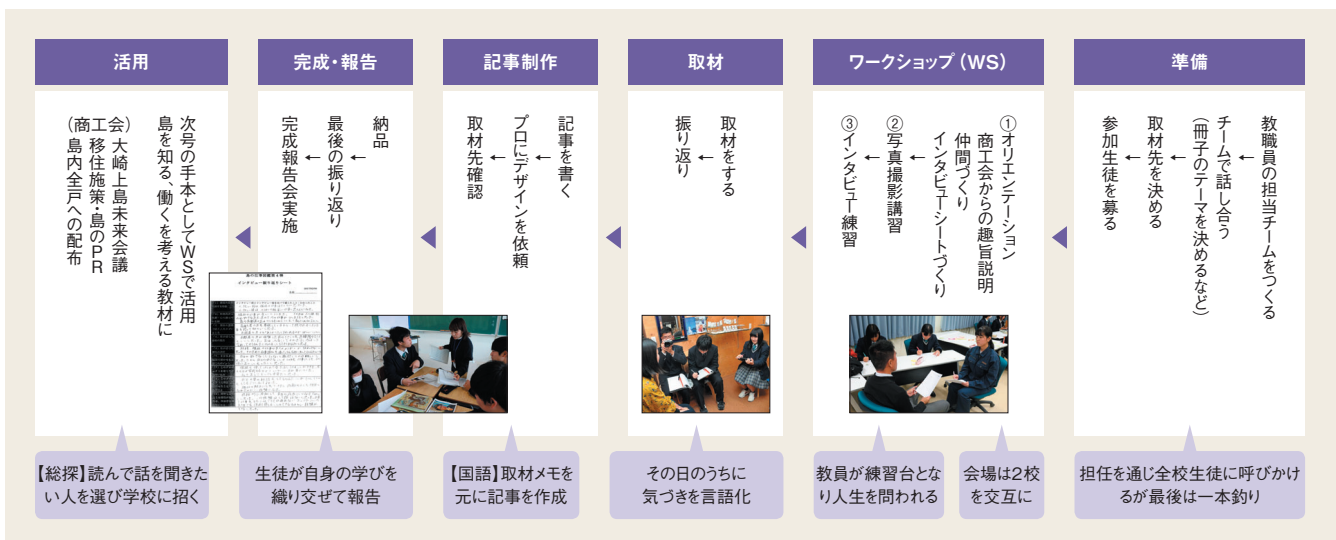
影響を受けるのは生徒だけではない。「教員は、一般社会で働いている人と話す機会も地域の人と知り合う機会も少ないものです。ですが、取材の引率をすれば地域の人に覚えてもらえるように、授業でやりたいことがあったときに、あの人なら手伝ってくれるかもとヒントになる。教員としてもすぐくプラヌになっています」と兼田先生。一方で地域の人にとっても、自分の話を一生

懸命聞いてくれた高校生は応援したくなる。取材をきっかけに「弟子入り」して魚の捌き方を教えてもらうようになった生徒や、福祉事業所でアルバイトを始め、そのまま就職した生徒もいるそうだ。

今では制作主体である商工会も、高校教職員や高校生もまちづくりの一員であるという意識をもつようになった。今年着任したばかりの久保信行校長は「行政や商工会の応援姿勢に驚き、また感動しました。生徒を地域に出すことで失敗もあったでしょうが、生徒が変わる姿を見て先生方にも地域の方にも喜びがあったのだらうと思います。生徒には地域でたくさん経験をしてみたいし、褒めたり叱ったりして欲しいながら、共に生徒を育てていきたいですね」と言う。

仕事図鑑に限らず、地域と関わることの多い大崎海星高校だが、コーディネーターの円光氏は「地元郵便局から消印のデザインを依頼された例のようにこれを一緒にやろう」と地域から声が上がりに、一緒に学びをつくっていく機会が今後さらに増えると思うんです。総探だけでなく教科でもそんな協働が実現することを目指したいですね」と言う。地域との協働による高校魅力化のトプランナーは、これからどんな進化を見せてくれるのだろうか。

『島の仕事図鑑』準備から活用までの流れ



大崎海星高校の魅力化プロジェクト5年間の軌跡は書籍「教育の島発 高校魅力化&島の仕事図鑑—地域とつくるこれからの高校教育—(仮)」として今夏、学事出版からの発行が予定されている。